

小林 哲也氏

帝国ホテル 取締役社長

#131



紹介者



外立 憲治氏
外立総合法律事務所 所長・代表弁護士

明治23年、日比谷に鹿鳴館が完成してから7年後、その隣接地に帝国ホテルが日本の迎賓館として開業した。宮内省が筆頭株主であり、時の財界が名を連ねた国策事業だった。日本の近・現代史とともに年輪を重ね、さまざまな歴史の舞台となってきた。今年で118年である。

昭和4年8月19日、東京上空に日本人の度肝を抜く巨大な飛行物体が姿を現した。ドイツが誇る飛行船ツェッペリン伯号である。全長236メートル(ボーイング747は71メートル)、最大直径30メートルの巨体で巡航速度は毎時135キロの性能だった。世界一周(米独日米の順)が目的であった。ツェッペリン伯号の開発者であるエックナー博士を含む乗客乗員41名が帝国ホテルに宿泊した。

4日間の熱烈歓迎の種々の行事を満喫した一行は8月23日、ロサンゼルスに向かつて飛び立った。太平洋上の4日間のメニューカパーにはツェッペリン伯号、富士山、そしてライト館が描かれている。食材調達、食事準備を帝国ホテルが担当したのだ。相当の苦労だったようだ。そして、ツェッペリン伯号は8月29日に全航程3万2000キロ、全飛行時間288時間11分の世界一周の偉業を達成した。

平成元年、創業100周年を翌年に控えたこの年、帝国ホテルに日本航空フランクフルト支店から1本の電話が架かった。フランクフルト空港公団からの要請であるが、何と60年前のツェッペリン伯号の生みの親であるツェッペリン伯爵の孫娘と当時のクルー2名が健在であり、日本を再訪したいと強く希望しているとのことだった。日本航空と協力して3名を招待することを即決した。

次回は

蒲野 宏之氏

(蒲野総合法律事務所代表弁護士)

にご登場いただきます。

「ちょっといいご縁」のお話

同年11月21日、3名を全館を挙げてお迎えした。60年前に先輩達がつくったご縁を、現在のわれわれが引き継ぎそして後輩に伝える。何と素敵なことか!

その日開催された「100周年記念記者会見」で、3名を特別ゲストとして紹介し、併せて60年前のメニューを再現して供した。ホテルはお客さまとのご縁で成り立っている。さまざまなご縁を大事にしてきたからこそこの118年。歴史に感謝し、これからもご縁を大切に積み重ねていきたい。